

令和 2 年 5 月 16 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04296

研究課題名（和文）保育者のアイデンティティ形成と自伝的記憶に関する長期縦断的混合研究

研究課題名（英文）A long-term longitudinal study using mixed methods on identity formation and autobiographical memories among childcare persons

研究代表者

西山 修（NISHIYAMA, Osamu）

岡山大学・教育学研究科・教授

研究者番号：50310850

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、養成期から初任期、中堅期に至る12年間の長期縦断的調査から、保育者のアイデンティティの変化を捉え、自伝的記憶との関係を詳細に検討した。混合研究方法を用いた検討の結果、保育者のアイデンティティの変化パターンには、「下降群」「上昇群」「低持続群」「高持続群」の4つを見出せることが明らかとなった。また、これらの変化パターンと自伝的記憶は明らかに対応しており、抽出された特徴語等から各群を整理した。今後の保育者支援への新たな手掛かりを得たとと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会の変動を背景に、今、保育者には一層高い資質・力量が求められている。他方、保育者の養成期、初任期、中堅期は成人形成期と重なり、アイデンティティ形成という発達上の課題に直面する時期でもある。本研究では、養成期から中堅期に至る12年間の長期縦断的混合研究により、保育者のアイデンティティの変化を捉え、自伝的記憶との関係を詳細に検討した。従来の研究に、こうした長期的調査を遂行したものはなく、本研究は初めて保育者のアイデンティティ形成過程の一端を実証的に示し、今後の保育者養成や支援を考える手掛かりを提供したと言える。

研究成果の概要（英文）：This study stands on long-term longitudinal research of 12 years from the training stage to the initial and middle terms. The study traced the changes in childcare person identities and clarified the relationship between long-term changes in childcare person identities and autobiographical memories. As a result, it turned out that there were four patterns of changes in the identities of childcare persons: "descending group," "ascending group," "low sustaining group," and "high sustaining group." These change patterns appeared to match the descriptions of the corresponding autobiographical memories. The study sorted out each group using the extracted keywords and the likes. This study provided clues to support childcare person.

研究分野：教育学

キーワード：保育者 アイデンティティ 自伝的記憶

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、世界の潮流は幼児教育・保育の振興にあり、その担い手(保育者)の実践の質保証やその支援に関心が高まっている(e.g., OECD, 2012; 厚労省, 2010)。我が国でも、子どもや家庭を巡る問題の複雑化に対応するため、保育者の専門性や社会的責任は、幼稚園教育要領等にも謳われている。しかしながら、我が国の幼児教育・保育は、主に量的拡充と効率化に傾斜している状況にある。正規雇用の経験者(特に中堅)の減少により豊かな保育実践の継承が困難にもなっている。また、業務の拡大や多様化から保育者の疲弊感も増大している(厚労省, 2010)。保育者の確かな成長を促し、実践の質を保証することが、重要な課題となっている。

(2) 教師・保育者の成長過程に関する横断研究(e.g., Berliner, 1988; 1994; 高濱, 2001)からは、総じて初任期の困難さが指摘されている。初任者の早期離職も問題化している。またそもそも免許・資格を取得しながら保育職に就かない者も多い。他方、近年の研究は、従来考えられていたよりも子どもの発達に果たす保育者の役割が大きいことを示している(e.g., Howes et al., 1998)。優れた保育者を養成、輩出し、その後の保育者としての成長を支えることが実践の質保証には不可欠である。

(3) Erikson (1950) によってアイデンティティの概念が提示されて以来、膨大な研究が蓄積されてきた。近年の研究は、アイデンティティ形成は青年期に完了するものではなく、様々な関係性の中で、それ以降も危機と再統合が続くものと捉えられてきた。本研究はEriksonのいう期(青年期)から期(成人前期)に至る者を対象に、アイデンティティ形成を専門性の形成を含めた次元へと広げ検討する。ある特定の専門職に焦点化し、長期に渡る大量データを検討したアイデンティティ研究は殆どなく、本研究はその先駆に位置する。

2. 研究の目的

(1) 社会の変動を背景に、今、保育者には一層高い資質・力量が求められている。他方、養成期あるいは初任期にあたる青年後期は、アイデンティティ形成という発達上の課題に直面する時期でもある。筆者は、しっかりと子どもの発達を支え援助していくこれからの保育者には、専門的知識・技能の修得のみならず、保育者自身の自我の成長発達を志向した養成とその後の継続的支援が不可欠と考える。そこで本研究では、養成期から初任期、中堅期に至る、保育者固有のアイデンティティ形成とその再統合の過程を長期縦断的混合研究から解明する。

(2) 具体的にはまず、保育者のアイデンティティについて経時的な変化パターンを検討する。養成期から初任期、中堅期に至る長期縦断的調査による量的データから、クラスタ分析により保育者のアイデンティティの主要な変化パターンを同定する。加えて、アイデンティティの変化パターンと自伝的記憶との関係を取り上げる。具体的には、各変化パターンにおける自伝的記憶の記述に基づき、質的な視点で検討することを試みる。これによりアイデンティティの変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードとの関係を明示する。これらの結果から、実践の質保証に繋がる、保育者支援のための新しい知見を得ることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、2002年から実施された保育者志望学生に対する大規模な調査データを活用し、長期縦断的混合研究を実施するものである。第1回(卒業期)調査は、関東、中国地方の短期大学4校において、卒業直前の1月末から2月にかけて実施した。調査は各大学の教員に依頼し、講義後などに無記名集団式で行った。第2回(初任期)、第3回(初任から中堅への移行期。以下、移行期)、第4回(中堅期)調査は、同じ養成校卒業生に、郵送法による質問紙調査を実施した。初任期は卒業から1年後、移行期は8年後に当たる。

本科費研究は、中堅期(12年後)のデータを収集し、これまでの縦断的データと結合し分析を試みるものである。4回全てに回答があり、保育者養成校を卒業後に保育職を経験している者を分析対象とした。また、全調査対象者の内、学籍番号の記入漏れ等によりデータの結合ができなかった者等は除いた。その結果、138名(卒業直後の所属等: 公立幼10名、公立保18名、私立幼38名、私立保64名、進学3名、その他5名。性別: 男性2名、女性136名。卒業期の平均年齢19.84歳、標準偏差.66、中堅期の平均年齢32.40歳、標準偏差.65)が分析対象となった。データ収集のため、3養成校(最終年度は4養成校)に依頼し、年次をずらしながら各回3年間かけて実施している。よって全データの調査時期は2004年1月から2018年5月となった。

(2) 保育者のアイデンティティの変化を捉えるため、谷(2001)が開発した多次元自我同一性尺度(Multidimensional Ego Identity Scale; 以下、MEIS)を用いた。同一性の感覚を測定するこの尺度は、信頼性・妥当性ととも高く、有用性の高い尺度と確認されている。本尺度は次の4つの下位尺度から構成される。すなわち、自己斉一性・連続性(自己の不変性及び時間的連続性の感覚)、対他的同一性(他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚)、対自的同一性(自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている感覚)、及び心理社会的同一性(自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚)である。各5項目、計20項目から成る。本研究では、

同一性地位の分類ではなく、量的に程度を検討することから特性論に立つ本尺度を援用した。アイデンティティの変化パターンの同定には 20 項目の総得点を用い、自伝的記憶を含めた考察の視点として下位尺度の 4 つの視点を用いる。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の 7 段階評定（7～1 点）で得点化した（反転項目はこの反対で得点化）。

(3) 保育者のアイデンティティに関わる自伝的記憶として「これまでの保育の中でもっとも記憶に残っている「ご自分のアイデンティティが揺らいだ経験」を 1 つ挙げ、次の ~ などを含め出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね、保育エピソードの記述を求めた。具体的には、その時の状況や様子、その時あなたが感じたこと、その後、この経験が保育に活かされたこと、及び今振り返ってその時のことをどう思うか、とした。また、この経験は何歳頃で、保育者になって何年目の頃かを尋ね、記入を求めた。さらに、この経験が、あなたのアイデンティティにどの程度、影響を与えたか、0～100 の数値で影響度の記入も求めた。回答は無記名とし、個人の属性に関する質問として「現在の職業・所属」「担当年齢」「性別」「年齢」「保育経験年数」等の記入を求めた。ただし整理のため、学籍番号の記入は求めている。調査対象にはデータは全て統計的に処理し、個人を特定することはないこと等を伝え、同意を得た上で調査を実施した。なお、第 4 回調査の実施にあたり改めて岡山大学大学院教育学研究科研究倫理委員会の審査を受け承認を得ている。

4. 研究成果

(1) 各時期の保育者のアイデンティティの様相： Table 1 には、時期別に MEIS 得点の平均値及び標準偏差を示した。また参考に 4 つの下位尺度得点の平均値と標準偏差も併記した。先ず、時期（卒業期、初任期、移行期、中堅期）を要因として、MEIS 得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った。分析の結果、統計的に有意な主効果が認められた。多重比較の結果、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期の MEIS 得点が高かった。

次に、4 つの下位尺度と時期を要因として、下位尺度得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果、下位尺度と時期の主効果が有意であった。交互作用は有意ではなかった。多重比較の結果、対他格的同一性に比べ、対自格的同一性と心理社会的同一性が高く、それらに比べ自己斉一性・連続性が高いことが示された。また時期は、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期が高いことが示された。

今回の調査対象者は、保育職を経験している者としている。従って、保育職を退いたり、転職したりしている者も含まれる。そのような調査対象者でありながら、成人形成期(Arnett, 2014)を通じて MEIS 得点は全体としては高くなってきている。ただし各時期における MEIS 得点の標準偏差は比較的大きいことから、保育者のアイデンティティには 12 年間に渡る多様な変化パターンが存在することが予想される。そこで以下では、各時期の MEIS 得点に基づいてアイデンティティの変化パターンの同定を試みる。

Table 1 各時期における MEIS 得点の平均値及び標準偏差 N=138

	卒業期	初任期	移行期	中堅期
MEIS (谷, 2001)	89.61 (18.29)	89.04 (21.03)	95.99 (21.04)	95.04 (20.11)
自己斉一性・連続性	23.95 (6.25)	23.47 (6.43)	25.41 (6.35)	25.11 (6.33)
対自格的同一性	22.58 (6.18)	22.16 (6.50)	24.24 (5.98)	23.75 (5.76)
対他格的同一性	21.33 (5.44)	21.24 (6.31)	22.70 (6.37)	22.48 (5.94)
心理社会的同一性	21.75 (4.71)	22.17 (5.38)	23.65 (5.23)	23.70 (5.17)

註：() 内の数値は標準偏差。

(2) 保育者のアイデンティティの変化パターン： 卒業期、初任期、移行期、中堅期の MEIS 得点に基づいて、平方ユークリッド距離を用いた Ward 法によるクラスタ分析を行った。分析の結果、明確な 4 つのクラスタに分類できることが示された。変化パターンの特徴を確認するために、統計量の比較を行った。Table 2 には、クラスタ別、時期別にみた MEIS 得点の平均値及び標準偏差を示した（後述する群名も記載）。各クラスタと時期を要因として、MEIS 得点を従属変数とした混合計画による 2 要因分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった。クラスタの単純主効果を検定したところ、卒業期、初任期、移行期、中堅期の全て有意であった。多重比較の結果、卒業期及び初任期では、第 3 クラスタに比べ第 1 クラスタと第 2 クラスタが有意に高く、さらに第 4 クラスタが有意に高かった。移行期では、第 3 クラスタに比べ第 1 クラスタが有意に高く、さらに第 2 クラスタと第 4 クラスタが高い。中堅期に至ると、第 1 クラスタと第 3 クラスタに比べ第 2 クラスタが有意に高く、さらに第 4 クラスタが高かった。

次に時期の単純主効果を検定したところ、全てのクラスタで有意であった。多重比較の主な結果を挙げると、第 1 クラスタは、卒業期から中堅期、移行期から中堅期と有意に低くなっていた。第 2 クラスタでは、卒業期と初任期に比べ、移行期と中堅期が有意に高かった。一方、第 3 クラ

Table 2 各クラス（群）における MEIS 得点の平均値及び標準偏差

	n	卒業期	初任期	移行期	中堅期
第1クラス・下降群	37	93.73 (13.19)	88.32 (12.37)	91.76 (12.50)	82.22 (8.57)
第2クラス・上昇群	29	86.48 (10.30)	86.72 (10.68)	108.21 (11.99)	105.72 (11.59)
第3クラス・低持続群	38	71.74 (13.10)	68.03 (12.29)	74.95 (17.15)	81.08 (18.57)
第4クラス・高持続群	34	107.76 (13.45)	115.26 (13.42)	113.71 (15.21)	115.50 (12.57)

スタと第4クラスでは、卒業期に比べ中堅期が有意に高いものの、総じて変化は見られなかった。これらの結果を踏まえ、各クラスの特徴を挙げると次のようになる。

第1クラスは、卒業期中程度の MEIS 得点を示すものの、卒業期から中堅期へと有意に下降している。中堅期の得点が低く、標準偏差も小さいことから、明らかな下降を示す群と言える。少なからずアイデンティティの揺らぎを経験している群と考えられ、特に中堅の立場になった時期に支援の必要な群と考えられる。以上のことから、第1クラスを「下降群」と命名した。第2クラスは、卒業期から初任期、移行期から中堅期に変化は見られず、初任期から移行期に MEIS 得点が大きく上昇している。移行の中にあつてアイデンティティの獲得に向かっている群と考えられ、移行期への支援について何らかの手掛かりを持つ群と考えられる。以上のことから、第2クラスを「上昇群」と命名した。第3クラスは、卒業期から中堅期を通じて、常に MEIS 得点が最も低い群である。中堅期に至っても相当数の保育者はアイデンティティの達成には至っていないことが確認できる。卒業期からアイデンティティに関わる課題を持ち、その解決がないまま推移している群と言える。そこで、第3クラスを「低持続群」と命名した。ただしこの群は、移行期及び中堅期の標準偏差が比較的大きいことから、成人形成期の後半の多様なパターンを内包している可能性がある。第4クラスは、卒業期から中堅期を通じて、常に MEIS 得点が最も高い群である。アイデンティティが高い水準で維持されたまま推移している群と言える。就職直後の環境変化や、初任期から中堅期への移行の中にあつても、アイデンティティが維持されている。そこで、第4クラスを「高持続群」と命名した。

(3) アイデンティティの変化パターンと自伝的記憶：本研究の目的の1つは、量的データによるクラス分析からアイデンティティの変化パターンを同定した上で、その変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードとの関係を明示することである。そこで先ず、群ごとの保育エピソードの全体的傾向を検討するため、全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder (Ver.3. Beta.01) を用いて分析した。先ず、全記述データを分かち書きし、17,570 語を抽出した。抽出語の種類は1,959 語であった。その中から1,595 語が分析に用いられた。分析に用いた品詞は、KHCoder の品詞体系に従った。Table 3 には、各群を特徴付ける語と Jaccard の類似性測度を示した。頻出語や各群に特徴的な語は、どのような文脈で使用されているかコンコード分析により逐一確認し、考察の参考とした。

加えて、現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度、記述された保育エピソードが自分のアイデンティティに与えた影響度について、群を要因とした1要因分散分析を行い、群間の違いを確認した。その結果、現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度に統計的に有意な主効果が認められた。多重比較の結果、現在の保育の充実度は、下降群に比べ高持続群が有意に高かった。これからの遂行への自信度は、下降群に比べ高持続群が高く、また低持続群に比べ上昇群と高持続群が高かった。影響度は有意ではなかった。以下、これらの結果を総合して、各群の自伝的記憶の特徴を整理する。

第1クラス・下降群は、「保護者」「良い」「感じる」などを特徴語として挙げることができる。コンコード分析からは、保護者の目を気にしながら、担任として職責を果たそうとする姿がうかがえる。本群は、卒業期中程度の MEIS 得点を示すものの、卒業期から初任期、移行期から中堅期と有意に下降している。この群に含まれる現職の中堅保育者は、現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度ともに低い。成人形成期を通じてアイデンティティの探求がなされるが (Arnett, 2014) その揺らぎを経験しながら達成には向かっていない群と考えられる。とりわけ、他者からみられている自分への意識が強い中で、保育者としての自分を自己定義することが難しく、保育に対して低い自己投入しかできていない群と考えられる。

Table 3 各群を特徴付ける語とJaccardの類似性測度

N=138

	1 下降群	2 上昇群	3 低持続群	4 高持続群	
保護者	.093	今	.073	子ども	.209
良い	.081	毎日	.045	保育	.146
感じる	.069	先輩	.044	先生	.088
伝える	.062	楽しい	.037	保護者	.078
担任	.062	気持ち	.037	クラス	.071
今	.061	出来る	.034	今	.063
食べる	.050	不安	.034	対応	.062
大切	.043	泣く	.033	園	.057
時間	.041	気	.033	感じる	.055
発表	.040	年目	.033	伝える	.053
				園	.055

第2クラス・上昇群は、第1クラスと相対する位置付けと言える。「今」「毎日」「年目」など、経験を時間軸に位置付け、継続的な頑張りを振り返る記述や、「楽しい」「気持ち」「不安」「泣く」など感情に関わる経験に関する記述が多くみられた。「出来る」の特徴語からは、子どもの成長や自分の変化に、意識的に目を向ける傾向がみられる。本群は初任期から移行期に MEIS 得点が大きく上昇している。移行の中にあってアイデンティティの達成に向かっていている群と考えられる。総じて、肯定的にこれまでの経験を捉え、重要な自伝的記憶として位置付けていることが、これからの遂行への自信度の高さに繋がっている可能性がある。

第3クラス・低持続群は、卒業期から中堅期を通じて、常に MEIS 得点が最も低い群である。「子ども」「先生」「保護者」など保育の対象や同僚に関わる語や、「クラス」「園」など集団や組織を意識した語が上位に挙がっている。とりわけ、「対応」「伝える」など保護者や園長とのやり取りに関わる記述に特徴が見られる。いずれも、起こった出来事に対して行動したり、対処したりすることに意識が向いており、受け身的な印象を持つ保育エピソードが多い。本群に含まれる現職の中堅保育者は、これからの遂行への自信度が最も低い。中堅期に至っても、これからの保育に自負が持てない状況がうかがえる。卒業期からアイデンティティに関わる課題を持ち続けており、その解決がないまま中堅期に至っている群と言える。

第4クラス・高持続群は、第3クラスと相対する。「子ども」「先生」など保育の対象や同僚に関わる語に加え、「自分」が上位に挙がっている点は注目に値する。「信頼できる先生に相談し、自分だけは流されないで楽しんで保育しようと決めた」など、周囲との関係の中で確かな自分を意識した記述が多い。また、「経験」「考える」「分かる」といった経験と思考過程の記述も特徴的と言える。全体として、周囲と自分に目が向いており、現実的な対象を意識しつつ、それぞれの保育の課題に向かっていている様子がうかがえる。さらに、記述からは、保育職への自信ややりがいを感じており、概して肯定的な捉え方がみられる。本群は、卒業期から中堅期を通じて、常に MEIS 得点が最も高い群である。現在の保育の充実度、これからの遂行への自信度ともに、最も高い。就職直後の環境変化や、初任から中堅への移行の中にあっても、アイデンティティが維持されており、最も自我の安定した群と言える。

(4) 総括と今後の課題：本研究ではまず、保育者のアイデンティティについて経時的な変化パターンを検討した。具体的には、養成期から初任期、中堅期に至る12年間の長期縦断的データから、クラス分析により保育者のアイデンティティの主要な変化パターンを同定した。その結果、「下降群」「上昇群」「低持続群」「高持続群」の特徴的な4群を抽出することができた。次に、これらのアイデンティティの変化パターンと自伝的記憶との関係を検討した。具体的には、各群における自伝的記憶の記述に基づき質的な検討を試みた。その結果、上昇群や高持続群では総じて、これまでの経験を肯定的に捉え、重要な自伝的記憶に支えられて今の自分があると位置付けられており、そのことが将来に向けた遂行への自信度の高さにも繋がっている可能性が示唆された。これに対して、下降群や低持続群では、自伝的記憶の記述として、保護者など周囲からの目に意識が向く傾向などが示され、否定的な意味付けが散見された。このように、アイデンティティの変化パターンと自伝的記憶との間に明らかな対応関係が示されたと言える。保育職に焦点化し、長期縦断的データからアイデンティティの変化の多様性を明示した研究は従来ない。また、保育者のアイデンティティと保育エピソードとの関係が明示されたことから、今後、具体的な支援を考える上での手掛かりを得たと言える。

今後の課題の1つは、介入可能性の検討である。本研究では、保育者のアイデンティティの変化パターンと自伝的記憶としての保育エピソードの特徴に強い関連が見出されたが、意図的に、保育エピソードの捉え方や意味付けの変容を促したり、感情喚起に介入したりすることで、アイデンティティの形成を促す可能性が示唆される。その際、保育について語ることは、保育者にとって日常的であり、特段の準備がなくとも、手軽にどこでも始めることができるという利点がある。アイデンティティの形成は、保育者が生き生きと保育実践を継続していく基盤になると考えられるが、自らの保育エピソードを捉え直し語り合うグループワーク等を通して、アイデンティティの形成を促す、支援プログラムの開発等が考えられる。

<引用文献>

谷冬彦、青年期における同一性の感覚の構造 多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成、教育心理学研究、第49巻第3号、2001、265-273 他

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----